

# 持続可能な社会の探究 I 「言語に依存しない情報発信」

芸術科（美術）吉村雅利

## 1. はじめに

本講座は、言語に依存しない方法を用いて社会的問題を解決するためのアイデアを創意工夫し、具体的な改善案を提案する探究活動である。探究の過程で多くの解決すべき社会的問題を調べて比較検討することによって社会的問題についての知識を広げ深めること、問題を分析して本質を見極めることで言語に依存しない方法で解決できる問題を選び出す分析力と判断力を磨くこと、問題を解決する具体的な提案を探究することで言語に依存しないグローバルな表現力を高めること、探究過程の協働やコミュニケーション活動を通して協働力やコミュニケーション力を高めることがねらいである。

## 2. 内容

本講座は、非言語的表現によって問題解決をするための探究活動を行うことを、様々な例を提示しながら繰り返し説明してきた。4月に東京都美術館で「プレフィールドワーク」を行い美術館の見学を実施した。作品搬入口や作品保管室の建築的空間や様々な表示は、作家や搬入業者などスタッフのみが利用することを想定して作られているため、観客の利用を中心に考えられた展示会場やロビーなどの空間や表示と比較して異なる点が多い、作品用エレベーターの構造や使用方法などの特徴は、観客用のエレベーターと比較して、大きさ、ドアの構造、ボタンの形状や位置、ボタンを押してからドアが閉まり動き出すまでの操作のシステムなど注目すべき相違点があるので、その理由などを解説しながら見学を進めた。

その後、各自が設定した探究テーマに応じて班を作り、フィールドワーク先を決め、5月には「班別フィールドワーク」として、美術館、病院、企業訪問などを訪問した。訪問先への交渉や依頼も生徒自身が行うので、希望の企業に断られて訪問できなかったことで設定したテーマを見直し変更した班もあった。また、予定通りに企業訪問を行ったが、探究テーマに結びつける有効な情報を発見できなかったためテーマを変更した班は、再設定したテーマが他の班と近似していたため、二班が協働して同じテーマで探究することになり、4班4テーマでスタートしたが、後半は事実上3班3テーマでの探究となった。

各班の探究はそれぞれ、「子どもが安心して利用できる病院づくり」をテーマに、病院の待合室の構造やシステムを見直し新しい提案を目指す探究、「ストレスフリーな社会の実現」をテーマに学校の環境や構造、教育のシステムを見直し新しい提案を目指す探究、「伝わりやすい映像やポスター」をテーマに、効果的な視覚的メディア表現と活用法の提案を目指す探究であった。

発表会では、「子どもが安心して利用できる病院づくり」のグループが発表を行った。発表者が、パワーポイントで見た資料や作図は、論文集よりも改善され完成度の高いものとなっていた。

### 3. 実施効果

第一希望でこの講座を選んだ生徒は、ほとんどいなかった。新設科目であったことも影響しているかもしれないが、そもそも内容が語学を得意とする本校生徒にとって盲点のような「言葉を用いない表現」での問題解決を探究する講座なので、第一希望でこの講座を選ぶ生徒が少ないのは予想通りである。本講座は探究テーマとする社会的問題の限定が無いので、別の講座で探究予定であったテーマをそのまま使えるので、受講講座変更による探究意欲の低下の様子は見られなかった。

「プレフィールドワーク」は、5月の「班別フィールドワーク」の際に見学場所で注目すべきポイントを見過ごさないための練習という目的で行い、「裏」と「表」の構造やシステムを比較することで、問題点として注目すべき点を発見し、問題解決の工夫点を例示した。美術館の「裏」と「表」の違いは、「美術品の移動のための構造」と「観客の移動のための構造」の違いであり、その違いはどのように異なる情報を発信し、どのような問題を解決しているのかについてヒントを与えながら見学を終え、「判別フィールドワーク」につながることを期待した。

「班別フィールドワーク」の報告会での各班の発表においては「プレフィールドワーク」の経験を生かしている点が見られたのだが、探究活動が進むにつれて「フィールドワーク」や「班別フィールドワーク」の経験が薄れ、それ以外のインターネット情報や他の体験の影響によって、予期していない方向へと流されてしまった班もある。5月以降「班別フィールドワーク」の機会をどの時期に何回設定すべきなのかは、次年度の授業計画において再検討したい課題である。今回は「班別フィールドワーク」後にテーマを変更した班があり、その班は最後まで遅れを取り戻すことができなかったので、途中でテーマを変更することなく最初に決めたテーマで探究を続けるように指導すれば、「班別フィールドワーク」も生かされ、より良い探究となったのではないかとも思われ、「班別フィールドワーク」の時期だけの問題ではない。しかし、最初に設定したテーマが探究の対象として無理がある場合もあり、変更しなければ問題解決の提案など不可能なものもある。最初はよくわからないまま、漠然とした問題、大きな問題、難しい問題を選んでしまいがちであった。柔軟性があり、フィールドワークやその後の探究によって微調整が可能な探究テーマを最初から設定できることが望ましいが、探究がかなり進まないと問題解決を導き出すことの難しさに気づかないまま探究テーマを決めてしまう事もあった。その問題解決が難しいという事に早い時期に気づいた班は、具体的な解決案を提案することが可能な問題へとテーマを修正しながら、テーマと解決案の相互の対応関係を明確にして、有意義な提案を導き出すことができた。しかし、難しすぎる問題をテーマに選んでしまうと、テーマについて調べ

るだけで時間がかかりすぎ、解決案を提示することが困難だと気付くのが遅すぎて修正が間に合わない。テーマ設定の困難さに気づくのが遅い班は、話し合いや議論が少なく、上手く協働できず分業しての調べ作業が多く、集まって議論することで提案する問題解決案を吟味し絞り込むところまで至らなかった。

他の講座と異なり、テーマの限定がない探究講座なので、テーマの絞り込みについては指導を入れるタイミングの見直しが必要かもしれないし、ある程度の絞り込みや限定も必要かもしれないとも考えるが、指導が早すぎると生徒はその真意を理解できないし、遅すぎれば有意義な問題解決を提案するに至らない。結論的には、テーマ決定は生徒の自主性に任せ、探究過程でテーマ修正の必要性に自ら気づき、テーマを柔軟に修正しながら探究を進めるという探究のプロセスを強く指導すべきと考えている。ただ、テーマ修正は、ある意味テーマのブレでもあるので、振幅が大きくなりすぎるとテーマが二転三転し、何を探究しているのかわからないという事態に陥る危険性も孕んでいる。